
キラキラと輝く。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キラキラと輝く。

【Nコード】

N2569M

【作者名】

はなちよこ

【あらすじ】

主人公、高水梓乃は高校一年生。
クラスのある男子に告白されたことがキッカケで、彼女の高校生活は大きく変わっていく。

「高水^{たかみ}さん」

そう呼ばれて振り返ると。

一人の男子が立っていた。

彼は同じクラスの鈴木君だ。

「ちよつと話があるんだけど……」

緊張した面持ちで彼はそう言った。

校舎の裏。

私と鈴木君は向かい合って立っていた。

しばらくの沈黙の後。

彼は勢いをつけるかのように少し声を大きくして言った。

「俺、ずっと高水さんのこと好きだったんだ」

私は驚いて鈴木君を見た。

鈴木君は……

次の日。

ユリやミユキは私のことを無視した。

挨拶をしても聞こえていないフリ。

お弁当を食べようと言っても仲間には入れてくれなかった。

まるで私はそこにいないかのように。

「なんで無視するかって？ 私達が悪いみたいに言わないでよね！」
放課後。

二人に「なぜ突然私を無視するのか」と問いたですと、返ってきた答えはそれだった。

ミユキは私を睨みながら続ける。

「鈴木君に告白されて調子に乗ってんじゃないわよ」

「別に調子に乗ってなんか……………それに告白は断つたし……………」

「ヒドイ……………私が鈴木君のこと好きだってこと知ってたくせに」

ユリは今にも泣きそうな声でそう言った。

「もう梓^{しの}乃なんて絶交だから」

ミユキはそれだけ言つとユリと一緒に教室を出て行ってしまった。

私は鈴木君のことは何とも思っていなかった。

特別、仲が良かったわけでもない。

私の彼の認識は「ユリの好きな人」だった。

ただそれだけ。

誘惑したわけでもアタックしたわけでもない。

彼はなぜか私に告白してきたのだ。

それなのに。

なんで私は友達を失わなければならないのだろう……………。

それから数日間。

めげずに二人に話しかけてみたが無視されるだけだった。

楽しいはずの高校生活は一変した。

一人ぼっちでいることが多くなった。

「静かだな……………」

私はそう呟いて目の前の景色を見た。

まるで模型のような街並み。

空は雲一つない青空。

頬に当る風がやわらかい。

今日は一月とは思えないほど暖かい。

授業をサボったのなんて初めてだ。

屋上へ来たのも初めてだった。

手に持っていた手帳を取り出した。

教室を出るとき、なぜか手にしていたものだった。

ここにはユリとミユキと三人で撮ったプリクラが沢山ある。それから私がデジカメで撮った写真も何枚か挟んであった。もちろん、その中には三人で撮った写真もある。

「なんでこんな物、持ってきたんだろう……」

私はそう呟いて手帳に視線を落とした。

その時だった。

「おい。授業中だぞ」

私は驚いて思わず手帳を地面に落としてしまった。足元に写真が散らばる。

屋上に入ってきたのは担任の久我先生だった。

先生は私の前まで歩いてくると、しゃがみこんで足元に散らばった写真を拾い始めた。

私も慌てて自分の写真を拾い始める。

「なんだ高水だったのか。珍しいな、お前が授業サボるなんて」
先生はそう言う一枚の写真を手にとった。

その写真をじっと見つめながらポツリと言った。

「綺麗な写真だな……」

それは。

春に撮った桜並木の写真だった。

自分でもお気に入り一枚。

まさか誰かに褒めてもらえるなんて思わなかった。

その瞬間。

ぽたりと地面に雫が一つ落ち、それが黒い染みになった。
コップから水が溢れ出すかのように

涙が後から後から流れて地面の染みが増えていく。
なんでよりによって担任の前で泣いちゃうんだろう。
バカだなあ……私……。

先生は慌てるでもなく戸惑うでもなく、いつも通りの口調でこう言った。

「なにか悩みがあるなら先生に相談しろよ」

それだけ言っていると先生は私に写真を渡して屋上のドアに向かって歩き出した。

「先生！」

気づいたら私はそう叫んでいた。

「くだらないな……」

「え？」

思わず聞き返した。

私と先生は保健室に移動していた。

保健の先生は出かけているようで部屋には私と先生の二人だけ。
思い切ってユリとミユキに無視をされていることを
先生に打ち明けたら、彼の第一声はそれだったのだ。

「そりゃあ無視されて落ち込んでいるのは、くだらないことかもしれない
ませんが……」

私は俯いてそう言った。

「違う。高水のことじゃない」

「え？」

「お前を無視してる二人のことだ。実にくだらない理由だ」

「でもユリは鈴木君が好きだったんですし……」

「関係ないだろ。それはただの嫉妬だよ」

先生はそう言つと溜息をついた。

「それでもユリとミユキは高校に入って初めてできた友達ですから・

「……」

「そんなくだらない理由で無視するのは友達じゃない」

「……はつきり言いますね。私一応、悩んでいる身なんですけど」

「高校に入って初めてできた友達って言っても、まだ入学式から八ヶ月だろ。あとまだ二年も高校生活は残ってる。だから本当の友達もできるよ」

私を見て先生が不思議そうな顔で尋ねてきた。

「……何を笑ってるんだ」

「散々はつきり言った後でそんなフオローされても……」

私は笑いながらそう言った。

「フオローのつもりはなかったんだけどな」

先生がそこまで言い終わると同時に授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

先生は立ち上がって私を見て言った。

「思ったより元気そうで良かったよ」

私は何も言うことができなかった。

一瞬、先生がキラキラと輝いて見えたのは気のせいだろう。

先生に話を聞いてもらったら随分と心が軽くなった。

だからと言って現状が変わるわけではないけど

一人で過ごす休み時間も前より苦痛ではなくなった。

数日後。

私は再び屋上にいた。

今日はサボリではなくお昼ご飯のためにここに来ていた。

冬に屋上でお昼を食べる生徒なんて私くらいのもので、かえって気楽に過ごせそうだ。

ガチャ。

屋上の重い扉が開いた。

濃いグレーのスーツを着た男性がこちらに歩いてくるのが見えた。

「元気か？」

久我先生は私の隣に来てそう言った。

「前よりは」

「そうか」

先生はそう言うつと焼きそばパンを頬ばった。

「寒くないか？」

「今日は暖かいですよ」

「そうか。さすが一〇代は違うな」

先生は少しだけ笑った。

「先生、いくつなんですか？」

「三〇歳だ」

「見えませんね」

「それは老けて見えるってことか？」

「いえ。若く見えるって意味です」

「それはどうも」

先生はそう言うつと缶コーヒを開けた。

プシュツという心地の良い音が静かな屋上に響いた。

「この前の写真、あれは高水が撮ったのか？」

「はい」

「お前、部活つてなにか入ってないだろ？」

「帰宅部ですね」

「それなら写真部に入らないか？」

「え？」

「顧問なんだよ、俺」

先生が私の顔を見た。

まただ。

また先生がキラキラと輝いて見える。

久我先生に言われたからではない。

顧問だから、とかそういう理由でもない。

これは私が決めたことだ。

「私は前から写真が好きだったし」

そう呟いて目の前のドアを見た。

ドアには白い紙に油性ペンで「写真部」と書かれた張り紙が貼られてあった。

「邪魔」

背後から聞こえた言葉に私は驚いてさつとドアの前から離れた。

小柄な女子が私の横を通り過ぎてドアに手をかけた。

一旦、手をとめて、こちらを見た。

まるで人形のような綺麗な顔立ちだった。

「もしかして入部希望者？」

彼女の言葉に私は頷いた。

「じゃあそんなとこに突っ立ってないで入ったら？」

人形のような顔とは正反対にツンツンした喋り方。

まるで氷のような印象を与える。

どうしよう……。

こんな子と上手くやっていける自信ないなあ。

そんなことを思いつつも「やっぱり帰ります」なんて言えずに写

真部の部室に入った。

部室は二人きりで気まずかった。

しかし彼女は一向に気にしていない様子で軽く自己紹介をしてきた。

「私は一年A組の南川りお」

「あ、私は一年D組の高水梓乃しのです」

「ところで写真もってる？」

「え？」

「自分の写した写真」

「ああ。持ってます」

私は手帳から写真を取り出すと南川さんに渡した。
小さな白い手が写真をパラパラめくっていく。

真剣な眼差しで写真を見ていたかと思うと顔を上げて私を見た。

「写真撮るの好き？」

「好きです」

私のその言葉に南川さんの表情がやわらかくなった。

そして今度は彼女が撮った写真を見せてもらった。

空、花、猫。

どれも可愛くて、まるで絵本の一部みたいだった。

「うわあ……上手い……どれも可愛いですね」

私がそう言うのと南川さんはきっぱりと言った。

「だって中学から撮ってるから」

強気な口調とは反対にその顔は照れているように見えた。

その時。

私は彼女と仲良くなれそうだな、と思った。

写真部は私を含めて六人だった。

みんな良い人達で私はすぐに打ち解けることができた。

「今日って久我先生は部活に来るんだっけ？」

私はそう言うのと隣にいる、りおを見た。

「今日は来ないって言ってたと思うけど」

りおはサンドイッチを食べながら言った。

写真部に入って一ヶ月が経った。

私と南川りおはあっという間に仲良くなって、昼休みはこうして一緒に昼を食べるのが日課になっていた。

「そっか。今日は来ないんだ」

私がポツリとそう呟くと。

りおはニヤニヤしながら言った。

「寂しい？」

「え？ 別に寂しくなんかないよ！」

私は強い口調で言う缶コーヒーを飲んだ。
しかし慌てて飲んだので、むせてしまった。

「梓乃は分かりやすいなあ」

「………なんのことよ」

りおは意地悪っぽく笑ってこう言った。

「久我先生のこと好きなんでしょ？」

誰があんなパツとしない先生！

だって三〇過ぎてるんだよ？

結婚だっしてないみたいだし彼女もいなさそうだし愛想はない
しズバズバ物事を言うし。

それならB組の爽やかな青山先生とかイケメンで有名な2年A組
の一条先生とか、そういう先生の方がいいに決まってる。

私は………。

廊下を歩いてる久我先生の姿なんて目で追いかけないし

先生が担当してる国語の授業は昔から好きだけだし

部室に先生が来るのなんて待つてないし

屋上に行けばまた来てくれるんじゃないかって思わないし

先生が飲んでた缶コーヒーと同じコーヒーを飲み始めたのは偶然で

私は別に何とも思ってない。

「高水さん。消しゴム貸してー」
最近。

席替えで鈴木君と隣の席になったのでよく話しかけられる。

最初は告白を断ったから気まずいなあと思ってたけど、鈴木君は普通に接してきた。

「いいよ」

私は鈴木君に消しゴムを貸した。

ふと視線を感じて前を向いた。

少し離れた席に座っているユリとミユキがこちらを見ていた。

私が彼女達の視線に気づくと慌てて前に向き直った。

その日の放課後。

教室に忘れ物をしたことに気づいて急いで取りに戻った。

教室から声が聞こえてきたので廊下で足を止めた。

この声はユリとミユキだ。

引き返そうと思い身を翻した時。

耳に二人の会話が流れこんできた。

「最近、鈴木君って梓乃によく話しかけてるよね」

「うん。だから今、梓乃と仲直りすればさあ。ユリも鈴木君と仲良くなれるかもよ」

「えー……仲直りするの？」

「違うよ。仲直りしたふりするだけだって」

「ああ。なるほどね。それはいいかも」

「それでさー。鈴木君と仲良くなれたら梓乃のことはまた無視すればいいし」

「いいねー。それ賛成」

私は二人の会話にその場から動けなくなっていた。
その時。

誰かが私の肩をポンと優しく叩いた。

顔を上げると、そこにいたのは久我先生だった。

先生は私の横を通り過ぎると教室のドアを勢いよく開けた。

そして二人に向かってこう言った。

「お前ら、くだらねーこと考えてるんじゃないよ」

ミユキとユリが怒って先生に言い返した。

「ちよつと盗み聞きするなんて最低！」

「久我のくせに説教すんじゃないよ！」

その言葉に自然と体が動いていた。

教室に入るとユリとミユキが驚いて私を見た。

私は二人を見て鼻で笑ってから言った。

「くだらない」

先生が私の顔を見たので満面の笑みを返した。

先生も優しく微笑んだ。

いつも以上にキラキラして見えたのは気のせいだ。

瞼に焼きついたままの先生の優しい笑顔。

初めて見たよ、あんな顔。

好き？

そんなわけじゃない。

だって先生を好きになつてどうするの？

叶わない恋なんてしてどうするの？

傷つきたくないよ。

だから早く消えてよ。

私の瞼の裏から消えてよ。

「嫌い！」

「は？」

突然、放たれた、りおの言葉に私は目を丸くした。

「自分に正直じゃない奴は大嫌い」

「……………それって私に言ってる？」

「あんたじゃなくて誰だって言うのよ」

「別に私は久我先生なんて好きじゃないから」

「嘘つきも嫌いだ」

りおはそう言ってイチゴミルクを飲んだ。

私は缶コーヒーを一口飲んだ。

ほんのりした苦味が口に広がる。

久我先生の顔を思い出した。

「好きで悪い?!」

私の言葉にりおは驚いた顔をした。

大きな目がさらに大きくなっている。

そしてニツと笑ってから言った。

「とことん協力してやろう」

私がこうして今、学校生活を楽しめるのも
りおと友達になれたのも

部活で楽しく写真を撮ることができるのも

先生のおかげなんだろうな。

でも。

そんな照れくさいこと口が裂けても言わないけどね。

模型のような街並み。

雲一つない青い空。

風はやわらかくて。

一月とは思えないほど暖かい。

それでも屋上にいるのは私一人だけだった。

そういえば。

ちょうど一年前も同じようにここにいたっけ。

あの時と違うのは。

いま学校がすごく楽しいことと……。

ガチャ。

屋上の重い扉が開いた。

現れたのは濃いグレーのスーツを着た男性。

「久我先生」

「なんだ元氣そうだな」

先生は私の前まで歩いてくると驚いたような顔でそう言った。

「元氣じゃダメですか」

「いや。さっき南川がお前が屋上で悩んでる、って言うから……」

「りおが？ それで来てくれたんですか？」

「そりゃあ、元受け持ちの生徒をほっておくわけにもいかないしなあ」

「先生らしい……」

「ん？」

「なんでもないです」

私はそう言うのと街の方に目をやった。

先生も同じように町に目をやりながら言った。

「今のクラスはどうだ？」

「二年生は、りおと同じクラスになりましたし他にも友達ができました」

「そうか」

「くだらない事なんて言ったりしない友達です」

「そうか。それなら良かった」

先生はそう言って笑った。

「もし三年生になって私が去年みたいに悩んでたら相談に乗ってくれますか？」

「もちろん」

先生は真っ直ぐ前を見たまま続けた。

「俺はずっと高水の味方だ」

やっぱり先生はキラキラと輝いていた。

(
お
わ
り
)

（後書き）

ここまで読んでくれた方、ありがとうございました。

これは2010年1月12日に書いたものです。
りおは結構、お気に入りキャラだったりします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2569m/>

キラキラと輝く。

2010年10月8日14時30分発行